大阪-ハンブルク友好都市 35 周年記念

アーティスト派遣プログラム

報告書

2025 年 12 月

国本真絵

目次

・レジデンス概要

・作家経歴

・活動内容

・コメント

◯レジデンス概要

派遣期間：2025 年 8 月 21 日～10 月 20 日（2 ヶ月）

会場：Hyper Cultural Passengers / Hamburg ドイツ

主催：一般社団法人日本現代美術振興協会
助成：ゲーテ・インスティトゥート・ヴィラ鴨川、ハンブルク文化メディア省
協力：Hyper Cultural Passengers、Mikiko Sato Gallery

2024 年は大阪市とハンブルク市の友好都市提携 35 周年にあたる節目の年で、一般社団法人日本現代美術振興協会（APCA）は 2024 年 7 月に開催した「ART OSAKA 2024」においてハンブルク在住アーティスト 3 名を招聘した特別展を実施しました。その相互交流の一環として、2025 年 8 月から 10 月にかけてレジデンスプログラムが実施され、大阪にゆかりのある作家として国本真絵を選出していただきました。

プログラムは公募により、志望動機や活動計画といったアプリケーション提出の一次審査と、面接による二次審査を経て選考されました。

◯作家経歴

国本真絵　KUNIMOTO Mae

1996　大阪生まれ
2021　大阪芸術大学 工芸学科金属工芸コース 卒業
2021-2025　大阪芸術大学 工芸学科金属工芸コース 非常勤副手

個展
2024 「CHILDHOOD」gekilin. / 大阪
2023 「OUTLINE」gekilin. / 大阪

グループ展
2025 「ART OSAKA 2025」大阪市中央公会堂
2024 「OSAKA ART MARKET」グランフロント大阪
「OSAKA DOPE!」渋谷ヒカリエ / 東京
2023 「Osaka Indecompe 2023」enoco
「20 page vol.1」gekilin.
「工芸のちから 2023」大阪芸術大学 芸術情報センター
「目利きが選ぶ my favorite 展」FEI ART MUSEUM YOKOHAMA / 神奈川
2022 「Osaka Indecompe 2022」TRI-FOLD(gekilin.) gekilin.賞
「HANSHIN Art Meeting」阪神百貨店ハローカルチャー
「ART!ART!OSAKA」大丸梅田店
「Osaka Laugh & Art 2022」大阪市中央公会堂
2020 「第 2 回大阪アンデパンダン展」TRI-FOLD(サロンモザイク)

◯活動内容

[レジデンススケジュール]

8 月 21	Hamburg 到着
25-29	Workshop ”Veddel Art Camp” 地域の子どもたちと
31-9/2	オランダ視察 / Groningen
9 月 12	Veddel Festival
19	Workshop Café nova にて　クッキー型制作
10 月 1	Workshop “SOUP of the DAY” Veddel Soul Kitchen(Café nova)にて
8-18	Exhibition “FILL IN THE BLANK”
12	トークイベント

[レジデンススペースについて]

場所：Hyper Cultural Passengers(以下 HyCP)

Veddel というハンブルクの川沿い、工場地帯近くの中洲の地域に位置する。移民が多く多種多様な文化が混在している。

HyCP は複数人のアーティストで運営されている、展示及びレジデンスが可能なスペース。ハンブルク外在住のメンバーもおり、私のレジデンスには主に Michael Kress にサポートしていただいた。その他にも Torsten Bruch, Chrisdian Wittenburg, Sophia Leitenmayer に協力していただきました。

スペースには 2 つのベッドルームがあり、私の他にポルトガルから来たデザイナーの Camila が 1 ヶ月ほど HyCP との仕事のため滞在していた。後述のワークショップ「Veddel Art Camp」を共同で行った。

[Workshop “Veddel Art Camp”]8 月 25 日～29 日

・子どもたちとのワークショップ

私がハンブルクを訪れたときはちょうど夏休み期間中で、休暇中の子どもたちはワークショップなどに参加することが定番らしく、Michael からワークショップを Camila と共に行ってほしいと依頼されていた。

Camila はドローイング担当、私は金属(アルミ板、銅板)担当となった。アルミ板を叩いてテクスチャーをつけたものを表紙にして、ドローイングをコラージュしたアコーディオンブックを作ることになった。アルミ板の他に、銅板を叩いてテクスチャーをつけてそれを版にしてインクをのせ、スタンプのように押すなども行った。

参加人数は 13 人ほど、毎日 10 時〜14 時で、お昼には Michael の作ったランチを食べる。 3 日目はみんなでハンブルク美術館へ行った。一部の子どもたちが普段通っている学校の先生であるルドミラも補助として参加していただいた。
はじめに子どもたちとワークショップを行ったことによって、その後、子どもたちを通じて Veddel のコミュニティーに馴染みやすくなり、とても助けられた。

[オランダ視察]8 月 31 日〜9 月 2 日
Michael の友人でアーティストの Jan Derk と Kevin Groothuizen にオランダの Groningen のアーティストスペースや文化施設などを案内していただいた。
2 人は Art Indeed という財団でレジデンススペースや展示、プレゼンテーションなどを開催している。見学したスペースは以下に記載

・De Bovenkamer van Groningen / 1908 年製給水塔 リノベーションスペース
古い給水塔を利用した多目的スペースで、現在は塔のエレベーター故障のため閉鎖しているが、1 階のスペースはアーティストのアトリエが運営されている。階段で上へ上がると、給水塔の円形を利用した 360 度ベンチが設置してある多目的ホールや、会場などがあった。以前は劇やプレゼンテーション、パーティーなど多岐にわたって使用されていたらしい。

・Forum Groningen
大型複合文化施設。2019 年オープンと新しい施設で、図書館、映画館、カフェ、ギャラリー、3D プリンターのラボなどが入っている。Groningen は University City と呼ばれるように大学生が多く、学生らしき人達が各々勉強に励んでいる様子だった。自習スペースも多く設置されており、このような施設があることを羨ましく思った。

・De Biotoop
かつての大学の生物学センターだった敷地と建物が、住居やアトリエ、ワークショップスペース、社会的施設を複合した文化的スペースになっている場所。アトリエやレジデンス中のアーティストと交流を行った。地下には広大な展示スペースがある。

オランダ視察でたくさんの文化施設を見学し、施設の使い方が上手いと感じた。一から建て替えたり、商業施設にされそうな場所が文化スペースになるという点は日本との大きな違いだと思った。

[Veddel Festival]9 月 12,13 日
Veddel で毎年行われている地域のお祭。土日に 2 日間、メインの通りで行われる。フードスタンドがあったり、フリーマーケット、学校などの展示、子ども向けのフェイスペイントなど様々。HyCP も Festival 内で以前アーティストと行ったワークショップで制作した作品を展示し、HyCP のスペースでも、夏に行われた子どもたちとのワークショップの作品を展示した。アコーディオンブックも展示し、子どもたちが家族とともに見に来たりと暖かい雰囲気だった。
このお祭りは地域のお祭であるため、基本的には皆ほとんどが見知った顔であるようだった。そのため、その場を私が歩いているとアジア人が珍しいこともあり目立つようだった。知り合った人との暖かさを感じつつも異国の地で感じる孤独感のようなものもひしひしと感じ、そのことを深堀りしたいと思い、後にこのお祭りで撮ったポートレート写真を元に作品を制作した。

[Workshop / Café Nova クッキー型制作]9 月 19 日
当初、企画していたレジデンスでの制作はハンブルクの土地勘が無いときに計画したため、Michael によるとリサーチするには広大すぎるとの助言をいただいた。そして Veddel というコミュニティーと関わっていこうということになった。Michael も私も料理が好きなことや、地域の人々と協働して制作することができるという点で、料理を通じたワークショップを行うことになり、うどんスープを作ることに決定した。更に、普通のうどんではなく人型のクッキー型でうどんを切り抜く事によって、人々が同じスープ(環境)に浮かんでいるように見立てた、小さなコミュニティーの象徴となるようなものを制作することにした。
スペースの近くに Café Nova という教会に付随したコミュニティースペースがあり、そこでは毎週曜日ごとにイベントが開催されていた。毎週水曜日には Soul Kitchen という、無料で参加できて共に料理を作り食べるという企画が開催されており、私のうどんスープ作りもそこで開催する運びとなった。
うどんワークショップの前に、クッキー型を作るワークショップを行ったが、それも Café Nova で女性のみで開催されるウーマンズフェスティバルと呼ばれる、女性の権利向上や社会参加をお祝いするお祭りでワークショップのテーブルを出させていただくことになった。会場ではたくさんの方に参加していただけた。その場で参加者の写真を撮り、印刷した写真のシルエットを元に、柵状にしたアルミ板を曲げてクッキー型を制作してもらった。

[Workshop / Café Nova うどんスープ]10 月 1 日
前述したように、Café Nova で開催されている Soul Kitchen に持ち込み企画としてうどんスープ作りをさせていただいた。

Soul Kitchen では、みんな同じものを食べるというポリシーがあり、ビーガンやハラルに沿ったもので料理をすることになっていた。そのため今回は鰹出汁などは使用せず、ドイツと日本のコラボレーションということで Michael が野菜出汁を作ってくれた。

集まった人々とうどんを踏み、制作していたクッキー型で抜き、トッピングを切って共同制作した。机を囲んでみんなで食べ、談笑を楽しんだ。皆さんがとても楽しかったと言ってくれて非常に光栄だった。

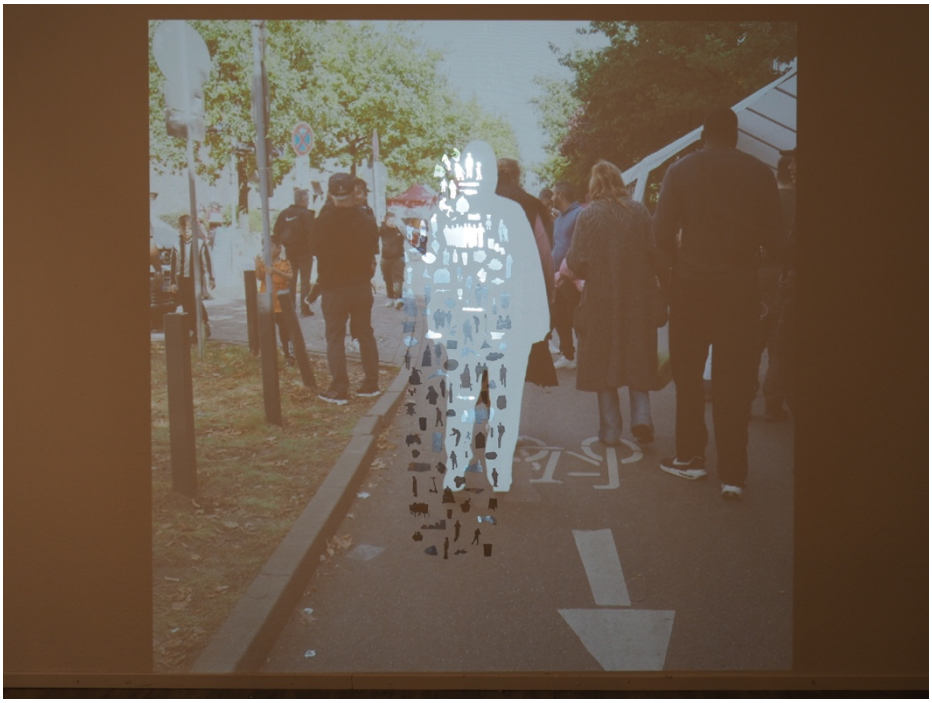
地域にこのようなコミュニティーがあり、誰でも接続できる環境であるということに関心を持った。そこで作ったうどんスープは、集まった人々とのコミュニケーションの器となり、またその場で形成された雰囲気が溶け込んだものになったのではないかと感じた。

[Exhibition “FILL IN THE BLANK”]10 月 8 日〜18 日

FILL IN THE BLANK と題した展示をもって、レジデンスの最後を締めくくった。

今回の滞在では、予定とは大きく違った面もあるがワークショップの拡充という方向性で有意義なものになったのではないかと思う。ワークショップの様子は写真やクッキー型などの展示で伝えた。また、滞在制作として展示会名と同名の「Fill in the blank」を制作し展示した。

Veddel Fes の項で前述したが、お祭りを歩く自身の様子を写真に収め、私のシルエットを白抜きにしてストップモーションのように写真を繋げた。それをプロジェクターで放映し映し出された壁に、アルミ板から切りだした色々な物のシルエット(私がハンブルクで撮った写真から選択した)のパーツを人型に配置した。



やはり人と人とのファーストインプレッションは見た目から得られる情報を元にすることが多く、Veddel Fes で私がひしひしと感じた部分でもある。しかし、ほとんどドイツ語しかわからない子どもたちとドイツ語が全くわからない私が、ワークショップを通じて交流できたことや、Café Nova で地域の人々と料理という協働ができたことを踏まえると、その初感は先入観や経験則が介入した反応であり、それを取り去ったところに人間の本質があると感じた。作品内の空白のシルエットは、見た目の先入観を排除したときにその空白を埋める先入観を浮かび上がらせる装置的な役割だ。

オープニングパーティーにはレジデンス期間に知り合った地元の人々が訪れてくださった。Michael も地域に根ざしたスペースにしたいと思っていたこともあり喜んでくれていた。

[トークイベント]10 月 12 日

展示期間中の日曜日に私、Michael、そして大阪から来ていただいた APCA の室谷さん、本企画のサポーターでもある Mikiko Sato Gallery の幹子さん、ハンブルク文化メディア省のユリアさん、2024 年に ART OSAKA で来阪し展示された Oliver Ross, Mariella Mosler, Josephin Böttger の 3 名をお呼びして、トークイベントが行われた。

大阪とハンブルクの違いや、レジデンスのことなどについてトークセッションをした。

◯レジデンスを終えて

初めてのヨーロッパということもあり、あらゆることが新鮮で興味の連続でした。滞在中に、ワークショップを主軸とした内容に変更していきましたが、地域の人々と協働していくなかで、「工芸」というものの頼もしさに改めて気付かされました。クッキー型も言うなれば工芸という括りに入る、生活の道具です。その道具を介して、参加者が手を動かし、会話が生まれ、場が創出されていく様子が印象的でした。クッキー型は工芸のなかでは簡易で素朴なものではありますが、それが主軸となってコミュニティーを立ち上げる力があることに工芸の強さと可能性を感じました。

レジデンスの醍醐味はやはり現地でこそ生まれるものにあると思うので、そういった意味で非常に有意義な滞在となったと思います。

これまで、自身の制作の中であまりワークショップを行うことはありませんでした。しかし、制作を続けていく上で、その作品を投じる先の社会とはどのようなものなのかをよく知ることは必要不可欠であると感じています。作品は他者や社会の中で意味を持つものであり、その文脈を理解せずに制作を続けることには限界があると思うからです。その点で、ワークショップは人々の価値観やコミュニティーのあり方に直接触れることのできる、社会を知るための一助となり得る場だと感じました。

こういった気づきなどを含めて、ハンブルクでの経験を糧として今後の作品制作に活かして参りたいと思います。

最後になりましたが、本プログラムにあたっては多くの関係者の皆様にご協力をいただきました。この場を借りて心より感謝申し上げます。

国本真絵